金沢龍谷高等学校 中等部
中等部通信
junior high school communication
vol. 23
令和４年９月30日（金）

学びの個別最適化 ⑦

さらに**奈須正裕教授** が書かれた文を続けます。

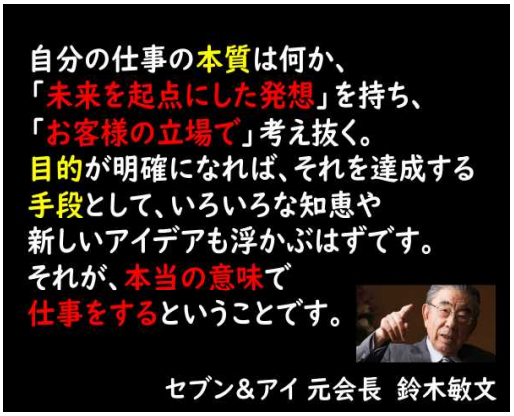
子どもたちが持っている、いい線はいっているが不正確であったり断片的である知識を、洗練させたり統合させていけるよう、教師が意図性や指導性を効果的に発揮することが必要です。そのような子どもの既有知識を導入での意欲づけに使うのではなく、自分たちの既有知識を足場に、より精緻で統合的な理解へと学びを深め、ついには正確な概念的理解へと到達させます。自身が所有する知識との適切な関連付けにより、子どもは意味を感じながら主体的対話的にそして着実に深い概念的理解へとたどり着くことができます。主体的・対話的で深い学びの第一歩は、授業を有意味学習にすることであり、その鍵を握るのは子どもが所有する既有知識の関連付けの有無なり深さの程度です。

教科の学びとして純然たる教科内容がしっかり習得されていると同時に、その学びが直ちに自分自身を見つめること、生き方の探求にもなっている。つまり主体的な学びの究極の姿は、自己の生き方・あり方に迫る学びと言うことです。

有意味学習とは、未知の問題や新しい学習を行う際に自分自身がこれまでに学んで身に着けてきた既知の知識を関連付けながら活用した学びのことで、これと反対で、既にある知識が個々の知識として独立に存在し、新しい学習内容を学ぶたびに、いわゆる丸暗記のように個々の知識量が増えていく学びは機械的学習と言われています。

自己の生き方・あり方に迫る学び

これが、個別最適な学びの終着点だと思います。



とんでもなく、大胆な授業の改善が必要なんです。
とんでもなく、大胆な意識改革が必要なんです。
でも、それは、必要に迫られているのです。

知識基盤社会 とは、新しい知識や情報技術が、社会を構成するすべての領域における活動の基盤として重要性を増した社会であると、中教審で定義されました。4つの特長は、

①知識の国境はないためグローバル化が進むこと。
②知識は日々進化し、技術革新や競争が絶えないこと。
③知識の発展に対応するには柔軟な思考力と豊富な知識を基礎とした判断が重要となること。
④性別や年齢に関係なく、参画することが促されること。

と言われています。

そんな **知識基盤社会の到来** は、実は、これまでの学校の存在価値・存在意義を大きく揺るがすこと、極端に言えば、「学校なんてなくたっていい」につながっていくのです。

「学校に来なければできない学び」がなければ、学校なんていらないのです。

それこそ、ペーパーテストで発揮される力だけを求めるならば、あえて学校に来なくても十分に力はつくのです。

だからこそ、学校は、本来の子育ての場へと生まれ変わる 必要があるのです。

９月４日の学校説明会で、「定期テストはしない」という私の言葉に、保護者のみなさんから小さなどよめきが起こりました。残念な、どよめきでした。悲しい気持ちになりました。あのときの西南部中の先生たちのあれほどのがんばりが、正しく伝わっていないことを意味していると思いました。

来週は、そこから、話をつなげていきます。